今度ははっきり言えた

気持ちを晴らすために、「なにくそ！」と、
山道をくねくねと、坂道を登って行った。
そのうち、国道に出て、それを北上して
行ったら、山科の京阪の駅にぶつかった。
ちょっと、一休みと、水村君の家を交番で聞いた。
町名も住所もなにもわからぬまま、
名字のみで探してが、交番の助けで、
かろうじて見つけて行った。
八幡でも、交番で聞けば良かったのだ！
しかし、そうも、僕も無意識に考えていた。
それを警官に尋ねる勇気が、
八幡では僕にはなかった。
もしかして、家まで連絡取られて、
「今、お宅の娘さんに会いに、家捜してます！」
なんて、親切に電話されたら、どうしょ？
なんて、そこ迄、僕は心配しながら、
駅の交番を素通りしていたのだ！
やっと、水村の家を見つけたが、水村はいなくて留守！
中一の妹が出てきて、僕の真っ黒な顔をじろじろ見る。
前にも、僕が中学一年の時に、家に来て、妹には会っている。
「ちょっと、休ませてんか、疲れたわ」
と、玄関に座り込み、僕は汗をふいた。